

### 個性論ノート(5) : 今日の個性論の逆説

SANUKI, Hiroshi / 佐貫, 浩

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

69

(発行年 / Year)

2009-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007544>

〈研究ノート〉

## 個性論ノート (5)

### 今日の個性論の逆説

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

今、個性が様々な場面で強調されている。労働者に対しては、個性的な労働者たれと強調されているし、学習においては学習が個性化しなければいけないといわれている。そして、自分の個性を磨こうというメッセージが溢れている。個性のないものは人間としての価値が低いかのような言説が蔓延している。

しかしにもかかわらず、このようなメッセージに沿って「個性」を追求・探究していくとき、実は個性の喪失がその先に待ちかまえているという逆説（パラドックス）が存在している。「個性論ノート（5）」では、この逆説を検討したい。

ここでは、個性論の逆説を、①個性を求める労働力市場の逆説、②学習の個性化論の逆説、③キャラ（個性）を演ずることによる個性喪失のメカニズム、④内なる個性追求の逆説、という4点から検討しよう。

### はじめに

#### ——秋葉原事件と個性論——

2008年6月8日、秋葉原で、ひとりの青年が、無差別殺傷事件を引き起こし、7人が死亡、10人が負傷する惨事が発生した。しかしその許されざる犯罪にもかかわらず、多くの人々が、加害者のおかれた境遇にある種の共感を寄せ、今日日本社会がこのような社会排除の極限に青年を追い込み、無差別殺人事件などに駆り立てるシステムを抱え

込んでいることに改めて恐れをいだくこととなった。

容疑者Kは、青森で育った。彼は中学では学力が高く、県内トップの進学校へと進んだが、そこで挫折し、工業系の短大へ進む。良い成績を取ることを親からも強く期待され、それだけに高校での挫折は、彼の自信やプライドをひどく傷つけるものだったようである。彼が働きはじめた日本社会は、青年のおよそ半数が非正規雇用へと入らざるをえない時代となっていた。彼も、短大卒業後（2003年3月）は、アルバイト的な生活を続け、その7月には、人材派遣会社の派遣社員となった。その後、派遣先を幾度か辞めて転職を繰り返し、正社員になったこともあったが長続きせず、2007年秋には再び派遣社員に戻る。2008年2月頃からは携帯サイトに盛んに書き込みをするようになり、〈負け組は生まれながらにして負け組なのでまずそれに気づきましょう そして受け入れましょう〉〈このまま死んでしまえば幸せなのに〉（3月2日）、〈誰でもいいから殺したい気分です〉（4月14日）、〈私よりも幸せな人をすべて殺せば、私も幸せになれるか？ 出来ますよね？〉（4月24日）等と次第に孤独と絶望感を深めていく。彼の孤独感を強めた一つに「非モテ」への絶望感——〈恋愛を楽しめるのは25歳までだと聞いたことがありますけど、もうとっくに過ぎてしまいました もっとも、不細工には恋愛する権利がそんざいしませんけど〉——があったことが指摘されている。そして契約人数を大幅に減らすとの派遣会

社の通告に対して急速に不安を募らせ、〈ものすごい不安とかおまえらには分からないだろうな〉(6月3日)といらだち、ついに6日、〈やりたいこと…殺人〉と書き込み、レンタカーでダガーナイフを買いに福井に向かい、8日、秋葉原での凶行を実行する。(洋泉社ムック編集企画部編『秋葉通り魔事件をどう読むか!?』洋泉社2008年、による。)

人と交わるのが性格的に苦手だったのだろう。また派遣労働は、労働者同士のつながりもほとんど生み出さない。恋人を見いだすこともできず、彼はネットを介して、他者とのつながりを求めようとした。しかし、結果的には、そのネット空間で彼は逆に、自分の孤独を思い知らされることとなる。押し寄せる不況の中で、いつ雇い止めになるかわからない不安が高じ、派遣先を解雇されたと思った彼は、ついに凶行に及んだ。

彼の犯罪をめぐっては、いろいろな解釈がされている。自分を無視した社会への恨みによる反抗、恋人と楽しく過ごしている同世代への恨みと自分の孤独のギャップに絶望した殺人、生きることへの絶望と社会への恨みが一体化したいわば社会を道連れにした自殺行為、派遣労働という未来への希望をうばわれた日々に加えネット空間での増幅された孤立感によって引き起こされた絶望の爆発としての殺人、あるいは人と人とのつながりを断ち切り派遣労働やワーキングプアというような絶望を各所に引き起こしつつある日本社会へのテロとしての無差別殺人……等々(『秋葉通り魔事件をどう読むか!?』、大沢真幸編『アキハバラ発』岩波書店、2008年、参照)。おそらくこれらの仮説的な分析は、容疑者Kの主観的な思いは別にして、一定の真実を言い当てているだろう。注目すべきは、今回のこの事件の評論をめぐって、この事件の原因を容疑者Kの「自己責任」——その生育歴や家族の病理、あるいはKの性格、精神の病理、等々——のみへ回収してしまうような論評がほとんど無かったことであろう。厚生労働大臣もこの事件へのコメントとして日雇い派遣制度を止めるべきだと述べざるをえなかった。この事件は、

そういう意味で、今青年がおかれている絶望を改めて浮かび上がらせ、日本社会の異常さを思い起こさせるものとなった。

自分の存在は意味がないという過酷なメッセージが孤独な青年を突き刺し、ネットを通して他者に呼びかけてもいっこうに応答が返ってこない、そういう自分の存在の透明化に直面して、容疑者Kは自分の存在を呪うほかに道が無くなったのだろう。何故自分は生きているのか、何故自分はこんな惨めさを味わわれているのか、どうして自分に語りかけてくれる他者、恋人がいないのか、自分の孤独を気にもかけないで楽しく生きている者が許せない……そういう思いを送っても誰も応答してくれない……、孤独なネットへの書き込みが自己肥大化していくその延長に、サイバー空間と現実空間とが交錯し、バーチャル空間における仮想殺人が、現実という時空にはみ出したようにして事件は起こったのかも知れない。

個性論のテーマに引きつけてみるならば、自分の存在の固有の意味が見いだしえないという苦悩、それこそが問題であろう。個性とは、自分の存在の固有性、非代替性によって実現され感得されるものであろう。しかしその点で見ると、今日の競争社会では並の能力を持つものであるならば無数に存在し、自分でなくともそのような役割は誰でもが代替することができる。そういうものは、いつでも取り替えられる短期雇用や派遣労働者として働くほか無いというメッセージが満ちている。他のものが代替できないような「オンリー・ワン」としての自分をつくらなければ、自分の存在の独自性、固有性は証明できないのだとする脅迫的なメッセージが行き交っている。

上田紀行は『生きる意味』(岩波新書2005年)において、「透明な存在」(24頁)ということばでその問題を述べている。それは、自己の個性を剥奪された、他者の必要と評価観点に自己を無限に同化させる人間のありようをいう。その時、自己は他者の必要に対する価値として、数値として評価される。それは置き換え可能であり、自己の固有の存在意義は消失する。透明な存在とは、その

固有性を持たない存在、他者といつでも置き換えられ得る存在を意味する。「透明」とは、「個性を持たない」ということと同値である。

しかし次のメッセージは、ただ単に「透明」でないだけではなく、「色」を持つにしても、その「色」は今までにない特別な「色」でなければならないという。

#### 記憶に残る幕の内弁当はない

あなたはもう、今の時代が多様化していて、カオスであるということに気づいていると思います。今までは、赤い色の会社は就職試験で赤色と分かる社員を集めていたし、黄色い会社は黄色い社員を、青い会社は青い社員を選んでいました。文系、理系もそれぞれはっきり求める学生像がありました。それは、学生がその会社に入って会社の色に染まって欲しいという前提があったからですが、では会社の色にきれいに染まることができたとして、それでああなたの力は伸びていくでしょうか。

また企業のほうでも、実はさまざまな色が欲しいと思い始めています。今はもうマジョリティーの時代ではなく、子供からお年寄りまでが受け入れてくれる最大公約数は求められなくなりました。これからは最小公倍数の時代であって、最初は10人か20人に受け入れられたことが、次第に認められてファンを増やし、30人、40人と広がっていく展開を見せていくからです。だから誰もがそこそこ納得する幕の内弁当のようなものは淘汰されていくでしょう。私は趣味が広いなどという自己アピールは、何の自慢にもならない時代なのです。

つまり、あなたは何色で、どれほど特別な形をしているかです。いびつな形をしているジグソーパズルにスペアはありません。人間もやはりこの人がいなくては困るという価値が必要であり、あなたが他とは違うという価値観をどう伝えるかなのです。

例えば若い人が話題にする映画や音楽に詳しく、トレンドを押さえているよ、という人は逆に難しい。そういう若者は大勢いるから、その100万人の中のただ一人だけに声をかければ求める人材は足りてしまうわけです。しかし、ブラジル音楽をずっと聴き続けてきて、やたらに詳しいというなら、やっぱり彼に聞かないと分からないよ、と思ってもらえる。自分の武器は何か、色は何か。それを突き止めることは重要なのです。

(談) (仕事力LIVEにて配布している就活Lab「就職スタートブック」より抜粋)

「朝日新聞」2008-10/3 広告より

ここでは個性とは、他者がない「色」を持つこととして述べられている。そしてそれは安全な雇用(社会関係)に入る切符として不可欠なものとして示されている。しかしそれは明らかに逆転した論理である。存在の独自性として個性をとらえる立場からすると、関係にはいることが個性を実現する不可欠な条件であるはずであるにもかかわらず、「個性」のない者は「関係」への参入を許されないとする論理がそこにあるからである。

90年代から急速に浸透してきた新自由主義社会は、人々からつながりをうばい、特別な能力や優れた特性(それが現実には「個性」とよばれているのであるが)を持たない者の社会参加への道をふさぎ、「個性」を社会参加のための切符とするような仕組みを生み出してしまった。本来、人は社会への参加において自己実現を達成していく存在である。したがって社会はそのような本質を実現する条件を全ての人間に提供する責任を負っている。それが困難になると、人は「社会排除(exclusion)」という恐ろしい事態にさらされる。だからこそ、ヨーロッパ社会ではその克服が、「社会参加」と「統合(inclusion)」政策として、社会政策の基本にすえられようとしている。ところが日本社会では、就職するにも、社会関係に参入するにも、特別な能力やキャラを演じる技や能力——それが「個性」と呼ばれている——を持た

ない者にはそれが許されないとされ、そこにも「自己責任」の論理が浸透しているのである。

秋葉原事件の容疑者Kはまさにそういう「自己責任」の中に放り出され、絶望を強いられ、そういう社会を葬りたい衝動に駆られ、凶行に及んだと見ることができる。

しかし何故、これほどに、「個性」が強調され、人々が皆「個性」を手に入れようとするにもかかわらず、いやそれ故に、「個性」が遠のき、人々が「透明化」せざるを得ないのだろうか。それは以下に見るように、そもそも今主張されている「個性」概念の必然的帰結ではないのかと疑ってみる必要がある。

## (一) 「個性」を求める労働力市場の逆説

### ——個性を実現する労働と個性を消し去る労働——

最初に、労働と個性の原則的な関係とは何かを再度確認しておこう。他の労働と比べて特殊な労働——例えば特殊に高度な専門性を必要とするとか、他者にはまねの出来ない作品や商品を製作するとかの労働——を個性的な労働と呼ぶことは良くあることである（注）。しかしその特殊性や専門性は、それを作り出した労働の個性度（個性を実現している度合い）を直接表しているものではない。もしこの論理をそのまま個性の実現と直結するならば、個性的でない労働——他の労働者と取り替えても少し慣れさえすればその作業が同じように遂行されるであろうような労働——は、個性を実現しないということになってしまう。それは今日の社会の大きな割合を占めるマニュアル労働が、個性を実現しない価値の低い労働であるということの意味することへ繋がる。しかし、はたしてそういう論理は正当な論理なのか。結論から先に言えば、労働内容が特別であることと、その労働が個性を実現するという事とは同じことではないというべきであろう。

（注）一般に、そのような差異を表現する形容詞としての「個性的な」という言葉は、ともすると、逆に差異が個性であるとする間違った認識を呼び起こす言語使用習慣上からくる誤謬を引きおこしやすい。多くの場合、「個性的」という形容詞は、ただ単に「特色ある」とか「特徴ある」とか「他の人と違って優れている」とか、あるいは「少し変わっている」というような意味で使用されていると見た方がよい。もちろん時には、その人のありようや生き様が、まさに人間としての存在の固有性、他の人に変えがたいものとしてその存在が人々に期待され、受け入れられている状態を表すこともある。しかし、形容詞としての個性的という言葉は、現状では、個性概念を迷路に導く可能性を持って使用されている。個性という概念を厳密に規定しようとするとき、この「個性的」という言葉の日常的な使用習慣を視野におかなければならない。付け加えれば、このような形容詞としての「個性的」という言葉からもたらされる個性認識についての誤謬においては、当然にも、他よりも優れた差異こそが個性であるという論理が不可避免的に追加されている。ただし例外というか、逆の場合もある。例えば障害が個性であるというような使われ方である。この場合には、より困難な、あるいは自己実現を妨げるような、ハンディーを背負わせるような差異をむしろ個性であると捉えることで、障害を背負った人の尊厳を主張しようという意図含まれていると見ることが出来る。この点についてはすでに触れた（個性論ノート②）が、改めて以下のことを指摘しておこう。障害にかかわらず、病気やさまざまな不幸やハンディキャップを強制されている状態を、個性が実現された状態と呼ぶことは出来ない。個性が実現されている状態を、自己がかけがえのない存在として実現されている状態と考えるならば、それらの自己実現を困難ならしめる諸障害は、むしろそういう個性の実現の障害として機能している要素というべきであろう。しかし人はそういう障害を抱えつつ、それ

と格闘し、その障害を背負ったままで、あるいはその障害を乗り越えて自己実現を達成することが出来る。そしてそこに実現された自己は、その障害との格闘をへてより豊かな内実を獲得した自己である。その意味では、障害との格闘によって、より豊かな自己を実現するということもできる。しかし重要なことは、このような場合でも、障害を持っているということ自身が個性を表しているわけではないということである。病気を持っているということそれ自身がその人の個性を実現するものではないと同様にある。個性を実現するプロセスに対して、様々な障害は、その形態や方法に特別な違いをもたらすとしても、その違いそれ自体が個性なのではなく、その他者と異なったものがその人の自己実現の形式に他者と異なった様式を与えるという意味で、その行動や様式が個性を担っているということである。障害それ自体を個性であるとする認識は、優れた差異の所有が個性であるとする所有の論理の裏返しとなっている。重要なことは、この「個性論ノート」で一貫して強調してきたように、その個人の取り結んできた社会関係の中における非代替性、存在の不可欠性が実現されている状態をこそ個性が実現されている状態として把握しなければならないということである。

重要なことは、労働と個性との本質的な関係性とは何かということである。労働には、二つの側面がある。第一は、交換価値生産としての労働の機能であり、もう一つは、使用価値生産としての労働である。具体的労働においては、第一の性格は、労働者にとっては、給与、労賃獲得としての労働の面と対応している。第二の側面は、何らかの使用価値を持った商品やサービスを生み出す生産活動という側面である。

第一の性格においては、資本主義的生産システムの上では、あらゆる労働はその労働の対価として、賃金を受け取るということを意味する。そしてその賃金は、労働の場以外での自己実現のため

に必要な商品(=使用価値)の購入に当てられる。賃金=貨幣は、ただ量の多少を持つのみであって、それ自体には個性は反映されていない。その賃金が、それを獲得した労働者の個性と関係するのは、彼が自己実現のために、その貨幣を使って彼が必要とする特有の使用価値(商品やサービス)を購入し、消費する(生活する)ということをとおして、いわば間接的なのである。にもかかわらず、人間の自己実現は、この消費無くしてはあり得ず、また労働以外の場での自己実現はこの経済的基盤に支えられた使用価値の消費が保障されないと不可能となる。この労働の第一の側面(賃金獲得労働)から、生存権を実現する手段としての意味において、労働の場を得ることが人権として位置づけられる。この権利が実現されないとき、人は各種の社会参加を妨げられ、社会から排除されてしまう。

第二の性格はそれとは異なっている。使用価値の生産(サービスも含む)は、その使用価値を必要とする他者との関係を編み上げていく。社会はそういう使用価値の生産と消費によって編まれる膨大なネットワークによって成り立っている。もちろんそれは、資本主義社会においては、商品の製造と販売、購入という市場を介した行為によって——すなわち個々人の意識を経由することのないままで——結びつけられる。重要なことは、そのような商品の生産という労働によって、人は、社会の中の互いに他者を必要とする人間の社会性、共同性の中に組み込まれ、その一端を担うということである。労働による商品の生産は、自らの創造物によって社会関係に参入する第一歩をなしている。人はこの労働の第二の性格を介して、自己の社会的な不可欠性を実現し実証するのである。その意味で、労働は、個性——自己の存在の社会的固有性——を実現する。労働は、社会的に価値ある使用価値を生産することにおいて、社会の中に自己の存在の意味を定位させ、人と人とを結びつけ、その労働者の存在の固有の意味をその関係性の中に実現する。そしてそのなかで、各自の能力(労働能力)は、そういう個性実現を可能

ならしめる力として働く。

ここで重要なことは、労働者の固有の存在価値は、その労働が特別な他人ができないようなものであるから実現されるのではなく、その労働が社会にとって、他者にとってかけがえがない—それなくしては生きられない—ものとして存在しているからこそ実現されているのだということである。そして労働とは一般的にそういうものだということである。

しかしいそいで付け加えなければならないことがある。この使用価値の生産の意味や関係の形成のプロセスは、資本主義的な生産システムの土台の上では、個々の労働者にとっては次第に抽象化され、物象化されていく。巨大な分業システムの中では、一人ひとりの労働は、それを統合する指揮労働の下で細分化され、それが如何なる使用価値の生産を担っているのかのイメージも剥奪され、ただ上からの指揮命令や機械の指示に合わせて行う部分労働へと分割されていく。分業は、そこで自己の使用価値生産としての労働の社会的意義を意識できる一部の指揮労働と、ほとんどその実感を剥奪された部分的機械的労働へと労働を差別化する。同時に、使用価値の流通と交換をとおして作り出される関係性、その中での自分の社会的な存在の意味化が実現される過程も、貨幣による交換によって媒介・代替され、具体的な他者と直接出会うことのないものへと変質していく。労働者が生産したものは、その生産が終わると同時に労働者から切り離され、資本の所有物として、市場に投げ込まれる。労働者が生産した商品が市場で売りに出されることで、その商品は、新たな社会関係（すなわち人と人との関係）を結び合わせるにもかかわらず、生産に携わった労働者は、その商品が市場を介して取り結ぶ社会関係からは疎外される。

もちろん、一方では、ブランドものがもてはやされたり、あるいは誰彼の作品であるということが明示されることでその商品の価値が上がるというような状況は、その商品の作り手にとってはその商品を自己の存在の社会的意味を実現する機能

を担ったものとして捉えることを助ける。また一般に対人関係において「消費」されるサービスの提供労働——教育や福祉の労働、多くの飲食業など——は、そのサービスの内容自体が自己の直接の「作品」であるとともに、そのサービスの受け手と提供者との関係を、まさに顔と顔を向かい合わせた (fais to fais) 対人関係として織りなしていく過程であり、そういう労働は、自己の固有の存在価値の実現を直接に担ったものとなっている。

そういう文脈からすれば、労働における個性とは、何よりもこのような労働の個性実現の機能をどう有効に機能させようかという問題としてこそ意識されるべきだろう。しかし先に見たような労働の場における「個性」強調—個性を持った労働者たれ—は、そういう文脈とはほとんど関係ないのである。先に見た広告メッセージ（「記憶に残る幕の内弁当はない」）は、他者にはない「色」をもてというメッセージであり、独特の色を持たないもの、色あせたものはいきられないぞというメッセージがそこには組み込まれている。

このメッセージは、haveの個性概念を基本としている。なぜならば、そのメッセージを送る側にとって、その優れた「色」を持った力は、その能力の所有者にとって意味があるのではなく、その「色」を買い取る側にとって、その買い取る側の要求や意図を実現するために意味のあるものとして認識されているからである。従って、その本人＝所有者にとってその所有物が如何なる役割を果たすかは、買い取る側にはまったく関心がないのである。それは、労働者が、能力の所有者として、自己の所有物（能力や学力を持った労働力）を売ることを目的として、市場に登場しているからである。従ってそこではまさに所有物が評価されるのであって、その所有物が売り手の人格にとってどういう意義を持っているかは問われず、ただ所有しているということが重要なのである。その意味では、雇用されて働く労働者は、労働の場においては、自己の目的や意図とはいったん切り離されて、資本の目的を実現するために自己の能

力を働かせるという関係にはいることなしには、労働に参加できないのである。それは労働が本来有している労働者自身の個性実現の機能を大きく疎外せざるを得ないのである。

この論理の中で、「個性」が強調される現代的な背景がある。それは本田由紀が指摘する「ハイパー・メリトクラシー」の時代が到来しているということである(本田『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版、2005年)。IT技術が急速に進展し、商品の差異化が促進され、またサービス労働が拡大していく中で、第二次産業を中心とする工業生産中心の時代——その中心は一定の水準に達した大量かつ安定した労働能力の確保——から、先端テクノロジーに対応した柔軟で創造的な技術力、思考力、創造性等が重視され、また新しい商品開発や販売戦略に対応した新しいプロジェクトを立ち上げ、競争を勝ち抜いていく企画力、統率力、さらにはサービス業に対応したコミュニケーション力、対人関係能力重視の労働力要求が前面に出されていくことになった。そこから、労働能力をめぐる際限のない差異化競争——企業の側からの差異化、格差化と、売り込む労働者の側からの差異化、個性化競争——が生まれることとなった。

一方で、分業は、労働を、商品の生産全体を企画し統制する視野を持った企画・管理労働と、部分化された工程をこなすマニュアル労働へと区分していく。後者は命令(指示)にしたがった、その指示への忠実のためにのみ意識を使う部分的、非主体的労働へと組み変えられていく。その極端な姿は、短期間の派遣労働に典型的に現れる。そういうケースにおいては、自らの労働と、具体的な商品の生産とは、意識の中ではほとんど繋がらない。ただ高い神経の緊張を求められるだけで、そこには自分自身の独自の意識的行為によって、まさに自分の存在の証としての作品が作り出されるという実感が存在しない。ハイパー・メリトクラシーの時代とは、実はこの労働の二重構造を生み出し、その土台に大量の画一的なマニュアル労働を必要不可欠としているにもかかわらず、それ

を価値を持たない労働として徹底的に格差化し非人間化する仕組みを持った時代として展開しつつある。

しかもこの差異化が、九〇年代以降のグローバル化の下での労働者賃金の格差化と低賃金化の動向と重なって進行したために、この差異化競争(個性化競争)は、激しい生き残り競争として展開することになった。その結果、個性をディスプレイできないものは、自らの自己責任において、ワーキングプア状態を受け入れざるをえないところへと追い込まれていったのである。かくして差異の度合いが労働者の価値を決定するという観念が、労使双方の認識として受け入れられるような状況が生み出されていくことになった。

それは、労働契約が「個別化」されていく動向とも重なった。ここで言う「個別化」とは「労働者の配置や労働時間のフレキシビリティ、労働契約の多様化、労働市場の流動化、労使関係の集団から個人へのシフト」(中野麻美『労働ダンピング』岩波新書、2006年、36頁)を意味する。そしてその「個別化」は、労働の「個性化」の方法であるとされた。しかしその実態は、中野が厳しく批判しているように、雇用条件の格差化による低賃金労働の大量創出、短期雇用化、不安定化、そして労働者の商品化(労働力の商品化という意味ではなく、労働者が市場の論理で価値が決められる商品として買ったたかれ、各種のダンピングにさらされることを表す)を意味している。そしてその個別契約の評価基準に「個性」なるものが位置づけられることになったのである。

この論理によって、労働者の賃金は、あたかもその労働能力の「個性」度に対して支払われるものであるかのような意識が形成されてしまう。「個性」のない労働者は、そもそもその労働に価値がないという意識が浸透し、低賃金を当然として堪え忍ぶ態度までが要求されることになってしまう。

しかし人は、自己が所有している能力がどういうレベルのものであれ、その能力に依拠して生きるほかないのであり、他者と比較して劣った能力

を所有しているとしても、その能力は自己実現するために自分が依拠できる唯一のかけがえのない能力なのである。それが他者と比較して優れていないからといって、価値がないとすることは決してできないはずなのである。それは単なる理想ではなく、産業革命以来の長い労働と資本との格闘を経て獲得されてきた社会的正義にはかならない。労働者の賃金は、人間らしく生きる最低額を保障するものでなければならないという基準が設定され、労働者の賃金決定を全て競争的市場の論理に委ねてしまうことはできないとする理念が打ち立てられ、最低賃金制度などによって憲法的原理として確認されてきたのである。

「個性を獲得せよ」というメッセージが、個性競争を煽り、同時に個性への自信喪失をもたらすのは、そのメッセージが、個性とは誰にでも保障されるものではなく、この労働力市場——ハイパー・メリトクラシーの中では人間力市場というべきか——での勝利者にのみ与えられるものだという事、従って、所有物を他者よりも「立派」にすることを煽る言葉として、受け止められるからである。労働は、各自が生きるための誰にも保障された権利——それは生存権を実現する人権のひとつとして承認されているとする日本国憲法の理念であろう——だという理念や制度が後退し、個性あるものだけが労働によって人間らしく生きる権利を獲得できるのだという恐ろしく転倒した意識や制度が生み出されている。

以上が、労働という局面における歪められた「個性」イデオロギーの実態と帰結である。

## (二) 学習の個性化の逆説 ——学習過程の格差化と個別化としての個性化論——

教育の個性化と多様化については「個性論(1)、(4)」で、検討を試みた。

学習における個性化とは、教育政策においては、多様化、個別化の意味で使用されてきた。最初に

政策的に教育の「個性化」を打ち出してきたのは、臨教審であった。

臨教審(臨時教育審議会1984-1987年)は、教育の画一化、教育制度の画一化を批判の対象とした。それは、単一の6・3・3制の学校教育制度体系が、多様な能力に対応した教育内容の差異化(いわば横の多様化)や、能力格差に対応した学校・教育コースの能力別差異化(いわば縦の多様化)を妨げているとして、「横」と「縦」の多様化に向けて学校制度を自由化しようとする意図を持ったものであった。しかしその「自由化」論は、当時未だ日本社会において、60年代から続いてきた「企業社会」型の学校から労働への移行が相当程度にスムーズに実現されていたことで、財界の側からもあまり学校制度体系上の「改革」の必要性が自覚されておらず、具体的な教育改革政策へは繋がらなかった。

その「縦」と「横」の多様化が切実な教育改革の課題として認識されたのは、90年代に入って、経済のグローバリゼーションが、雇用政策の大きな転換と繋がり、また新自由主義的社会改革が推進される中でのことであった。第一に、企業が、終身雇用の割合を縮小し、労働現場に必要な労働力を短期雇用として求めるシステムを大幅に取り入れたことによって、その多様な労働現場に対応した多様な労働能力を労働力市場で直接確保するために、多様化された労働能力形成を学校教育に求めたことがある。第二に、新自由主義的学校教育システムが導入され、学校選択制が導入されたことで、学校を差異化する競争が始まったことがある。第三に教育費政策とも絡んで、全体としての教育予算の縮小の下で、学校を差異化し、政策目的に添った教育投資を重点的に行うという戦略から、学校の差異化、格差的多様化が政策的に推進されたことがある。中高一貫校の出現や東京の都立高校の再編などが、その典型であろう。そして第四に、学力格差が拡大する中で、その矛盾に対応するために、進度別の学習コースを設定するなどの「工夫」が広まり(「習熟度別授業」はその一環である)、それが「個性化教育」の名で説

明されるというような事態も関係している。そういう教育の変化を教育理論の形で正当化するものとして、「学習の個性化論」が登場した。

しかしそのような文脈における「個性化」は、個別能力の「差異」に応じた教育の差異化を実現することを「個性化」と称しているものである。これは所有するものの差異を個性ととらえる個性概念に基づくものにはかならない。しかしすでに検討してきたように、獲得する能力の差異化が学力の個性化であることととらえることは、大きな間違いであるといわざるをえない。なぜなら、学力が個性化されるという意味での個性的な学力とは、その獲得された学力が、個性の実現という目的に深く統合されている状態をこそ意味するものでなければならないからである。自分の存在の固有性の認識の上に立ち、そしてこの存在の独自性の表れとしての主体的目的の意識的追求、また他者との間に取り結ぶ関係の独自性から与えられる自らに引き受ける役割の独自性、それらの存在の固有性を担った目的意識や役割意識と学力とが統合される時、学力は個性実現の機能を担い、その学力は個性的な学力となる。したがってそれは、人格と学力との統合によって達成されるものであって、所有する学力の他者との差異化によって達成されるものではない。特に、学力競争が激しくなる中で、競争のために獲得された学力が、自分にとっていかなる意味を持つのが不明となり、学習嫌いや学習意欲の喪失という矛盾が危機的様相を呈している中で、このことが重視されなければならない。

ここでの克服すべき問題は、差異自体（もちろん正確に言えば、優れているという差異）が目的と化して、学習が推進されことである。その問題性をそのままに放置して、生き残り競争のハードルとして多様な能力が設定されるとしても、それは決して学力と人格との統合を促進することには繋がらない。競われる能力が内容的に多様なメニューとして提示されているという点では多様な評価基準に沿った多様な競争に選択的に参加するという構造が生まれるにしても、そのことは決して

自らの人格的な目的と学力とが統合されることを保障しない。そこで提供される多様な能力は、労働力を求める側が切実に必要としているものではあったとしても、学習者に対しては、競争を介してその課題が外部から強制されるという性格を相変らず背負わされてしまうからである。

その点とも関係して、「学習の個性化」論が批判される必要がある。「学習の個性化」論の代表的論者の一人である加藤幸次の主張（『授業形態と授業環境』岩波講座（『教育の方法3「子どもと授業』1987年）は、中教審のいう教育の個性化論と非常に親和的なものになっている。

加藤論文は、80年代の受験学力批判、詰め込み授業批判の共通基盤の上に、「受け身な詰め込み授業」の原因を、「学級集団による同一歩調の追求（一斉性）」、「学級集団による同一内容の追求」、「評価発言による同一方向の追求」に見て、この「同一」性の打破に課題を焦点化する。そのため授業モデルは、すべてに「個別学習」が組み込まれ、「子どもたちは自分の、あるいは、自分たちのベースに従って学習して行く」という「自由進歩学習」が主張される。この学習では、「学習のねらい、学習課題、課題追求の手順、追求に必要なメディア（教材・教具）、評価手段などを一つのセット」とした「学習パッケージ」が提供される。個性化とは、子どもの個別の学習段階に添って異なった学習パッケージに取り組みむことと把握されている。その結果、加藤の主張は、子どもの学習ベースの差異化による学習の「個別化」、さらにはコンピュータソフトを利用して学習を細かく何十段階にも分け、生徒が一人ひとりその階段を自分のベースで昇っていく学習へと具体化される。それは学習課題を子ども個々人が別々に設定するという「学習課題設定」における個別化に行き着く。かくして彼の学習の個性化論は、学習の個別化とその完成形態としての個人別の総合学習の提起とをパッケージとした中教審型の学習論へむかう。

批判されるべきは、学習内容の個性性＝差異性を中核として把握する学習の個性論である。教育

内容を、自分の目的や関心を実現する力量として摂取し、組み替え、主体化し、学習を自己の関心や目的を実現する営みへと組み替え、他者との関係を実現していくとき、学習は、自己実現、自己のアイデンティティ実現の意味を持ち、自己の個性を実現する行為となる。たんに知識を所有したというハビング (having) の状態ではなく、自己の存在 (ビーイング=being) を実現する行為として知識が機能するとき、学習は個性化されるのである。その意味では学習の個性化は、決して学習の「ペース」に応じた「個別化」、差異化ではなく、学習それ自体のありようとして把握されなければならない。したがって、学習の差異化を個性化と位置づけることは出来ない。

個性は、関係性のなかで成立する側面をもつ。個性とは、他者との深い関係性における自己の存在意味の確認であり、他者との共同性のなかでの自己の存在の独自の価値の自覚の意識である。他者との関係性、共同性への契機を欠いては個性はその立脚基盤を喪失する。また「学習パッケージ」を疑うことなく個別に進める学習では、多様な生活の文脈を背負った子どもの側の多様な文脈性からの豊かで批判的な知の読み取りという共同学習のメリットも実現され得ない。むしろ段階が細かく区分された単一のコースを生徒がそれぞれのスピードで孤立して昇るという形に近く、画一化に通じる可能性もある。一緒に生活し、一緒に学習するからこそその中で個性が輝くという側面を重視しなければならない。加藤の学習の個別化論は、むしろそのような関係性を剥奪するものとして機能せざるを得ない。あるべき「学習の個性化」論は、学習を個性とアイデンティティの確立につなげる道を示さなければならない。

学習の差異化は、決してそれ自身を自己目的として推進されるべきではなく、個々人の目的意識や個人が取り結ぶ関係性、その関係性に支えられて形成される役割意識や目的意識の独自性——その学習者にとっての学習の必然性——を土台としてこそ推進されるべきものであり、共通の内容を学習することがその妨げになるわけではない。む

しろ、個々人の目的意識や役割意識の差異、多様性が、共通の学習内容を土台にした豊かで多様な展開を作り出し、その多様性が共同の学習を豊かにする側面が忘れられてはならないだろう。

このような意味において、学習の個性化の議論もまた、逆に個性喪失として機能する可能性を持っていることを、そして何よりも支配的な教育現実がそういう問題性を深く組み込んで進行していることを見ておかなければならない。

### (三) 関係に参加するための個性の演出による個性喪失

——閉じられた共依存関係へのとらわれ——

今日の子どもたちの関係において、個性的存在であることが非常に重視されている。しかしそれはますます個人を不自由化し、個性的な主体であることを妨げるように作用する可能性がある。

孤立を恐れる優しさの演技合い（「優しさの技法」土井隆義『個性を煽られる子どもたち』岩波ブックレット）としての共依存世界は、一人ひとりがその場の雰囲気を良好に保つための各自の役割を「キャラ」として演じることで、成立し維持される。その場を維持しようとみんなが努力しているにもかかわらず、その場の空気を読めないでそれを壊すものは、KY（空気が読めない）として、嫌われ排除される。場が異なれば、異なったキャラを演じることになる。そこでは、その場の関係の中に自己の居場所を確保するために、多大な注意と微妙な関係調整のためのアンテナが張り巡らされて、一人ひとりには神経をすり減らしていく。個性を関係の中での固有の位地を確保することによる存在の独自性、固有性と把握するならば、この「キャラ」を演じることは、他者ではなく自分にしかできない役割を担うという点で個性を演出することでありながら、その実、関係性にとらわれて、真実の自己表現を抑制して、関係性から求められる役割を演じるという自己喪失ともいう

べき状態におかれることを意味する。関係から求められる(強制される)役割を演じることで、自己が主体性を剥脱されて、いわば個人が関係性の関数として規定されてしまう現象を引き起こす。そこで演じられるキャラは、本当の自己表現ではないために、決して自己のアイデンティティを高めるものとはならないで、むしろ本当の自分と演じられるキャラとの間に距離感が高まる。キャラを異なった場で複数演じることを強制されるときには、そこで演じられる複数の自己は、一つ一つが分断され、分裂している。そういう分断された異なったキャラを演じる状況におかれるとき、多重人格的な様相を帯びてしまうこともある。

この事態は、今日の「個性」を求める状況に共通する病理であるといっても良い。労働能力の差異(優れた差異)が個性であるとしてそれを競い合う事態にしても、就職面接で期待されている人格を演じることも、集団の中に自己を位置づけるためにその居場所の鑄型に合わせて自己を演じることにしても(「メタルスーツを着ること」——中西新太郎「社会への出にくさとは何か」『教育』2007年11月号)、それを獲得したり演じたりすることのその個人に即した内的必然性、それがまさに自分の主体的な創造の過程と一体のものであるという性格がうばわれるとき、それは自己によって意欲されたものではなく、廻りから強制されたものとなる。その状態の下では、自己の表現や創造が、自己の主体的な創造の過程に反するものとなり、意欲のシステムやアイデンティティの一貫性が揺らいだり矛盾にさらされたりしてしまう。

この病理はすでに中島梓が、『コミュニケーション不全症候群』(ちくま文庫、1995年、1991年発表)において、鋭く提起していたものである。中島は、脅迫的な「適応」を強いる社会に対して過剰適応することで「居場所」を見出そうとする病理として「ダイエット症候群」を捉え、オタクをその対極に捉えようとした。

「オタクは社会の中に自分の居場所を見出す可

能性を捨てて、自分の内宇宙にそれを構築した人間であると私はいった。ダイエットをせずにいられない少女たちは、社会が与えてくれるあまりにもせまいすきまに自分をあてはめようとして身をけずりつづける人間である。彼女たちははじめから、逃れるべき自分の内宇宙さえ持たない。摂食障害の症例研究の書が例外なく、拒食症にかかる患者の性格特性として、『まじめで優等生タイプで、親や周囲の期待に答えようと過度のがんばりを重ねる長女』をあげているのは偶然ではない。そういうタイプの個人には、はじめから社会規範から逸脱しても個人の存在の方が重大であるという確信が欠けているのだ。というより、そのように感じ得るだけの自分自身、というものをまったく育てられないように育てられてきたのだ。」(157頁)

子どもたちは他者のまなざしにサラされて、異質な他者と指さされないように極度の緊張と努力を求められている。そこでは、場の雰囲気や素早く読み取って、うまく対処していくために気を配り、決してその価値基準からはみ出さないこと、そのために本当の自分を押し隠すために細心の配慮を払っている。「オタク」や引きこもりとは、そういう緊張感からの自己防御の戦略、そういう場からの撤退の戦略であると見なすことができる。そして今やそういう自己改造は、激しい労働力市場における競争の領域にまで浸透している。そして学力や能力に止まらず、ハイパー・メリトクラシーの中で、性格までもが商品化され、各自の性格が競争と比較にさらされ、いわば性格改造にまで駆り立てられ、個性競争が煽られているのである。従来の学力や能力の獲得は、ある程度の客観的な内容をなし(例えば科学や知識等々の獲得として)、努力によって獲得できるものと把握できたが、性格改造は人格改造としての側面を帯びてしまう。その「能力」の一部分が、表現力や「コミュニケーション力」として取り出され、それに対応したスキルがあるとしても、その土台にある感情や性格とそれは深く繋がっており、いわば

運命的な要素——生育環境などをも含んで——が大きく影響する（注）。もちろん学力にしてもそういう要素を持つとしても、学力の獲得は、人格の改変を直接強要するものではない。それに対して、「性格改造」は、より深い人格の作り替えを求めるものであり、それができないときには、常に本当の自己と演じる自己との分裂と葛藤を抱えたままで進められるほかないものとなる。そこに、演じられた自己を受け入れることのできない精神的葛藤と多大なストレスが生じる。

（注）実はこのことの中に大きな問題性が含まれていることに留意しなければならない。知識や科学、あるいは技が、その人格形成と切り離されて推進される形態が、日本の受験学力の大きな特質となっている。そして学習による人格形成作用は、むしろその学習が推進され意欲される様式—競争—の教育力によって、推進されてしまう。競争的人格、「自己責任」的価値観、競争的利己的な能力主義観、等々が人格に組み込まれていく。そういう点では、学習内容そのものは、人格と交渉することなく獲得されていくのである。学習が本格的な人格との交渉を伴い、学ぶことが生きることへの姿勢や意欲を作り替えるような質を獲得することは、学習と授業改革の中心的かつ根本的な課題となっている。しかしその過程は、人格を内側から改変的に創造していく新たな価値意識や認識の形成を介して推進されるものであり、いわば人格の内的かつ主体的な発展として遂行されるものである。ところが、ここでいう「性格改造」は、自己を取り巻く関係から、あるいは就職競争から——すなわち外からの強制によって——提起される課題としての「性格」を演じる「スキル」によって、身に付けなければならないものとなり、そこに演じられる自己が新たなアイデンティティの形成に統合され、主体的に意欲され課題化されたものとなっていない時に、本当の自己と演じる自己との分裂を絶えず孕み続けなければならない性格を持っている。

個性が実現されているとは、本来自分が自分であることというアイデンティティの実現された状態であるということもできる。存在の独自性としてとらえられる個性が、時間的な経過の中で、一貫性を保ちつつより豊かに展開しているという感覚、すなわち自己というものの存在の独自性が、過去から現在、そして未来への一貫した自己の連続的展開を貫いて把握されるその意識がアイデンティティとしてとらえられる。存在の固有性、非代替性が、その時々との関係性の中に刻印されつつ、時間軸の中で自己の存在の独自性が連続したものとしてとらえられるとき、アイデンティティとして意識されるのである。その意味で、アイデンティティ概念と存在の独自性としての個性概念とは、表裏をなしている。

自己の主体的創造が自己の参加する対人関係の圧力の下で閉塞されるとき、自己はその関係性の一方的、受動的な関数となって、いわば関係に囚われた不自由な自己となってしまふ。共依存関係とは、その関係を絶対的なものとして、それを維持するためにその関係性に自己を従属させた、不自由な関係を意味する。そしてそういう関係の中で自分に与えられた（あるいは期待される）役割を演じる（＝個性を演じる）ことは、まさに個性喪失として機能するほか無いのである。

本来、個の存在は、社会（歴史や時代の課題、等々）との関係でその意味を問われる。個の存在は歴史的存在であることにおいて社会の中に定位することが可能となる。しかし閉ざされた関係性にとらわれるとき、それは社会関係からの退行として、他者に囚われた自己を演じることで、本質的な社会との関係性から閉ざされることとなる。それはいわば一種の閉塞的な共依存関係であり、その閉じられた関係は個人を社会から隔離する。その意味では、個性やアイデンティティーは、他者関係だけによって構成されているものではない。それは他者関係の構築を媒介にして、社会との関係が形成されていくプロセスとして把握されなければならない。主体的な自己の創造と他者との関係性の構築をとおして、社会的、歴史的存在

としての自己が創出され、そこにおける自己の役割や位地の非代替性の発展の中にこそ個性が実現されていくのである。そこにおいて、真の個性化と社会化が、統合されていく。関係性は絶対のものとして、そこに個人が従属するという形を取るのではなく（閉じられた関係性）、個人の側からの社会創造（変革）のプロセスと統合された関係性（開かれた関係性）の創造が求められるのである。個人の創造と、他者との関係性の創造と、社会そのものの創造とが、自己の主體的な目的や見通しの下で統合されることにおいて、個性が刻まれ、アイデンティティが実現されるのである。

土井隆義は、今、他者による承認欲求が高まり、それゆえに子どもたちが「脅迫的に群れつづけなければならない」（『個性』を煽られる子どもたち』47頁）ことの背景には、思想や信条などを媒介とした「自己評価に客観的な色彩を与えてくれる社会的な根拠を内面化」（同47頁）し得ず、「社会的な根拠という、いわば『一般化された他者』による承認を感じ取ることができず、具体的な他者からの承認によって自己を支えてもらわなければならない」（48頁）状態におかれており、「内発的な衝動や生理的な感覚だけに依存した人間関係」（同55頁）に依拠して、そこから承認欲求を得ようとしていることがあることを指摘している。また、だからこそ「感覚的な一体感による結合の様式」（同55頁）を維持するために、必死になって、「優しさ」を「過剰に演出する」状態へと追い込まれていると分析する。そのため、本来関係性の中で浮かび上がり、関係性を土台として自立していくはずの個性が、逆に関係性に埋没し、関係性に従属したもの、そして関係性の関数としてしかとらえられないものへと変質してしまうのである。

## （四）内なる個性追求の逆説

### ——人格の内側に向かう脅迫的な個性探究の隘路——

外からの要求にあわせて自分をつくり、個性を演じることへの反発と抵抗の意識は、逆に、ありのままの自分の内部に「個性」を見いだす個性発見の方法を魅力あるものと感じさせる作用を果たしている。それは、「ありのままの自分でいい」というメッセージとともに、多くの青年の個性追求の方法となっている。土井隆義は、「現代の若者たちは、自分を取り巻く人間関係や自分自身を変えていくことでえられるものをではなく、生まれ持ったはずの素朴な自分のすがたを、そのまま自らの個性と見なす傾向」（同上、26頁）を持っていることを指摘している。

カウンセリングという方法は、そのケアの過程で、「受容」という方法を行行使する。この受容においては、そのクライアントの人格全体が受け入れられ、肯定される。それは「ありのままの自分でいい」というメッセージを送り、自己肯定感を回復する方法として行行使される。しかしそのことの自動的な延長に、個性が実現されるわけではないことに留意しなければならない。

臨床心理学者の高垣忠一郎は、「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」という2つの「自己肯定感」があることを指摘している。ここでいわれている「共感的自己肯定感」とは「身近な人間（例えば親）にかけがえのない存在としてまると愛され、その苦しみを共感され、ありのまま受け入れられるような共感的な人間関係」（高垣『生きることと自己肯定感』新日本出版社、2004年、207頁）であるとされている。家族のような親密圏における共同性はまさにそのような「共感的自己肯定感」を実現するであろう。そしてその関係性の中に、自己の存在が肯定され、その存在の独自性が浮かび上がってくることもまた間違いない。しかし人は親密圏にのみ生きるものではない。公共圏における職業参加や政治参加を通して、

ここでも自己の存在の独自性を実現しなければならないのであり、むしろ歴史的な自己の存在の意味を実現する主舞台、個性としての自己を実現する主舞台を親密圏に止めることはできず、公共圏へと展開していかなければならない。高垣自身が指摘するように「自分を肯定する感覚には、自分がかけがえのない存在として愛され、かわいがられているから自分を肯定できるという面と、自分が役に立つ能力や特性を持っているから自分を肯定するという面と、……2つの側面がある」(同186頁)のであり、この両者が実現されなければならないのである。(注)

(注) ただし、高垣のこの規定は、より正確には、後者については、「自分が社会の中で独自の役割を担っており、その意味でかけがえがないと自己認識する面」というべきだろう。もちろんそのためにはその役割を担う能力や特性を必要とする。しかし重要なことは、「能力や特性を持っているから」なのではなく、むしろその役割を持った位置を参加として確保することによって、それに相応しい諸能力を現実化させ、発達させていくというべきだろう。参加は全ての人間にとっての権利であり、保障されねばならないものである。全ての人間は、その能力を発揮し行使して、主体的な参加を実現する権利と力量を持っていると考えるべきであり、能力や特性は、その際いかなる場で参加を果たすかには大きく関係するにしても、その能力が低い故に参加が拒否されるということがあってはならないのである。その点を明確にする上では、むしろその能力や特性にかかわらず、あるいはその能力や適性に<sup>1</sup>応じて、全ての個人が社会に参加して、その存在を自己肯定できる社会システムが求められていると考えなければならない。

しかし、高垣の「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」という区分では、実は、この公共的な領域(公共圏)における個性の実現、自己肯定感を積極的に位置づけることができないのでは

ないか。その点で、高垣が、ヨーロッパ的な自己肯定感を「セルフエスティーム」として、それを「競争的自己肯定感」に近いものとして位置づけている点が問題を含んでいるのではないか。公共的な世界で、自分の行為によって、自分が他者とともに生き、他者を支えているという能動的な自己肯定感、さらには歴史の展開において自己の存在を意味あるものとして認識できる歴史観の獲得によって、自己の存在の独自性、固有性を実現するということが、自己肯定感にとって大きな意味を持っているのであり、そのようなあり方を、「競争的自己肯定感」という概念では、適切に表現し得ないのではないか。それはむしろ、「社会参加による自己肯定感」とでも呼ぶべきではないか。そして「競争的自己肯定感」は、そのひとつの競争主義的なシステムを通した(歪んだ)現れとして把握するべきではないか。そうしなければ、自己の存在への肯定感を、無限に他者による「受け入れ」——「共感的自己肯定感」——に求める一面化や、自己の存在それ自体に他者が承認してくれる何か優れたものを持っていることを脅迫的に探し求める自己の内部への「個性探し」へと向かわせることにならないであろうか。それは先に指摘した、いわば脅迫的な「承認欲求」を、ふたたび引き起こすことに繋がる可能性を持つのではないだろうか。

個性論においては、親密圏と公共圏との関連は、それぞれの圏における個性の実現の独自のありようが、もう一方の圏における個性の実現を支える相互関係において機能しているにとらえるべきだろう。親密圏における「共感的自己肯定感」の実現なくして、人は公共圏への参加の方法や力量や「勇気」を獲得することはできないし、社会参加における困難や挫折を乗り越えて公共圏における再度の自己肯定感の達成へ挑戦することが困難になる。公共圏での「社会参加による自己肯定感」を高めることで、物質的にも精神的にも親密圏を支えることが可能となる。そもそも、今日における「承認」欲求には、社会的存在としてのありようにおいて「承認」が得られないことによって、

それを「親密圏」における共依存的な閉ざされた関係に求めようとするベクトルを指摘することができるのである。また今日の家族病理を見ても、いわゆる「教育家族」が、子どもを社会の競争的評価基準で厳しく責め立てざるを得ない圧力の下におかれていることに大きな原因がある。公共圏における人間評価のシステム、個人を社会参加させ社会の一員として誇りを持って生きさせ得るシステムの形成なくして、親密圏の病理もまた克服され得ない状況がある。

発達論的な視点に立って、親密圏から公共圏への参加という時間軸をおいて考えてみれば、親密圏での「基本的信頼感」(エリクソン)の獲得なくして、子どもが公共圏へ参加していくことは困難となり、子ども・青年はその「基本的信頼感」を基盤にして、少年期、思春期、そして青年期的な自立を、次第に深く社会参加の中で達成し、社会と自己との新たな統合の中に、自己のアイデンティティを達成していく。ここでは、無条件的な受容から、能動的参加による自己肯定感の獲得にいたる社会的自立が不可避の発達上の課題となるのである。

## (五) 個性論の矛盾について

四つの視点から現代の個性の強調が、逆に個性抑圧として働く矛盾の構造を検討してきた。個別には今までの「個性論ノート(1)～(4)」で検討してきた面もあるが、改めて個性論の矛盾として整理してみた。

### (1) 個性論イデオロギー批判の基本枠組み

これらの矛盾、逆説からは、今日の個性論イデオロギー批判の基本枠組みを読み取ることができる。それらを改めて、総括しておこう。

第一に、今日の「個性論」ブームを創り出しているのは、人格の外側から——具体的には労働力市場や様々な社会集団の側から——個人に対して向けられている労働力や人格に対する要求の新しい展開であると捉えることができる。その要求内

容が、「個性」として求められるのは、その能力が単なる従来型の労働能力としてではなく、人格のありようと一体化した能力として求められていることによっている。そのため、人間存在が、社会の構造に激しくさらされて、その場に求められる能力や人格のありようと自己を脅迫的に同化させる作用が、非常に強力に働いている。しかもそれは、競争的な職業選択の評価基準として、あるいは人間の共同性を実現する関係性への参加と排除を分岐する評価基準として、いずれも激しい競争的な基準として提示され、その結果として「個性競争」が組織されるという事態を生み出している。そこでは、人間存在の内的本質が実現されていくその結果として個性が実現されるものとしてではなく、社会や関係が求めるいわば鋳型に自己の人格を合わせる行為として「個性」を形づくるのが求められている。

第二に、したがって、そこでは、すでに個性は、どのような能力を所有しているか、どのようなキャラを演じることができるか(能力があるか)、そしてそれが他者よりどれだけ勝っているかを基準として評価されるものとなっている。それは、その能力やキャラ(性格)が、それが使用される場面で——すなわち資本の活動を担う労働として機能する場で——どれだけ有効に機能するかが評価の基準となっていることを意味する。個性とは個人の存在の独自性を土台として、そこに個人の所有する諸力が統合されて、実現されるものであるとする存在論的な個性規定からすれば、全く逆のものとなっている。個人の無力性や孤独(関係からの排除)を強要する人格的危機を広範に引き起こす社会基盤の拡大の上で、勝ち組にのみ与えられる社会参加(職業的参加や各種の関係性への参加)のハードルとして、所有としての個性(それは結局、要素化された能力や性格にほかならない)を競わせるものとなっている。

(注) 一つの補足をしておきたい。個性は、今まで幾度も繰り返述べてきたように、その存在の独自性としてこそ実現される。各自が持つ

ている社会的存在性は、各人に固有のものである。それは長期にわたる個人の固有の生きる営みの結果として、他者とは異なった、その個人が固有に取り結んできた無数の関係性の上に築かれている。個性とはその集積されてきた関係性の固有性、その固有な関係性の他者による被代替性によって与えられているものである。関係性を欠いた単なる特徴は、個性を実現することはできない。さらにまた、今まで一貫して主張してきたように、存在の固有性を個性として把握する個性概念は、その個人が所有するものによって個性を規定すること、その存在が持つ様々な所有物の独自性（他との差異）によって、その存在が個性的であると規定することを批判し拒否する。しかし事態は単純でない。関係の固有性によって意味づけられた個は、その意味や役割を担うために、自らの所有する力や能力を駆使し発達させて、よりその固有性を積極的、成功的に担うことのできる諸力を蓄積していく。そういう意味では、関係性の中で獲得・実現されていく存在の固有性を担う諸力が蓄積され、そこに独自の存在性の実態を持ったものとして現れる。その個の存在の独自性を担ってきた諸能力は、自己のアイデンティティを担うものとして所有され蓄積されていく。そういう存在性に統合された所有物としての諸力は、個性の一環として現れる。しかしそれは静止したある地点の自己によってたまたま所有されている能力としてその所有者の個性を実現しているものと捉えることはできない。そうではなく、人生のあるプロセスで、自己の存在の独自性を刻んできたその存在のありよう（行為であったり関係の形成であったり役割の達成であったりする）を実現した力としての歴史を刻み込んだ状態において、その存在の独自性（個性）を支え、自己が自己であることの統合的な意識（アイデンティティ）を成立させているという意味でそうなのである。「個性論ノート②」で検討したように、エーリッヒ・フロムは、そのような所有の状態を、「ある様式」としてとらえ、その特徴を

「自分の人間的な力を生産的に使用するという、内面的能動性」の状態であると述べた（フロム『生きるということ』116頁）。そのことを踏まえるならば、アイデンティティに統合された所有物は、個性を担ったものとして、存在の独自性（個性）を構成していると把握することができる。

第三に、そこにはある種の個性についての段階論的ともいうべき論理が働いている。差異としての個性的能力を持つことによって個性は実現されるという論理は、論理必然的に優れた差異を所有しないものは個性を実現できないとする論理に通じる。しかし存在の独自性として個性を把握する論理においては、人は、他者との関係に入り、社会に参加していく中で、自己の存在の独自性を構築し、その関係性の特質（歴史的、また社会的な特質）に規定されて固有の目的を持ち、相互に支え合い期待しあう固有の—その人にしか作り得ない—関係性を豊かに構築する中で、より強い未来への目的と希望を形成する。個性はそのような関係性の発展に即して発展し、どう生きるか、どういう力を獲得するかは、まさにその個性の発展の見通しの中で計画され、意欲され、探究されていく。人は自らの個性を一貫して発展させる中に、自己のアイデンティティを獲得し、その発展として未来をも構想する。そう考えるならば、今日の問題は、今生きている事態が個性の実現のひとつのプロセスとしてその生きる行為が自覚され実現されていない「今現在」の生き方こそが問題とされるべきであろう。個性は、ある優れた差異としての能力の所有によってはじめて展望できるものではなく、日々の生活それ自体が個性の積み上げとして機能しているという連続性においてとらえられるべきものなのである。問題とすべきは、優れた差異を所有しているか否かではなく、今の—同時にまた今までの—生きるという行為がかけがえがないものとして実現されているかどうかなのである。個性を実現するのは関係性であって、その関係性を作り出す力として自己の能力を磨き機能させてきたのかどうかこそが問われるの

である。

第四に、より根源的に考えるならば、われわれが目指す社会とは、能力の如何にかかわらず、個々人の存在をその尊厳において実現する社会であり、関係性の構築である。そしてそのような社会的基盤に支えられて、個性は全ての個人において実現可能なものである。それは遠い未来における目標ということではなく、日本国憲法の論理において、すでにその理念が宣言されているのである。個人の尊厳が宣言され（11条13条、基本的人権、個人の尊重）、「最低限度の生活」（25条）が全ての人に保障され、社会差別や社会排除を禁じ、また労働に参加することを権利として宣言した（27条、「勤労の権利を有し」）日本国憲法の理念において、個性の実現は、全ての個人に保障された権利であり、社会システムはその実現を義務づけられているのである。にもかかわらず、社会排除を強要する社会システムが、特に90年代後半からの社会の新自由主義的改変によって急速に拡大し、そういう個性の実現を今日の社会において困難にしているのである。その視点に立つならば、そもそも、個性を所有する能力の関数としてとらえる把握自体が、いわば個性の「自己責任」論ともいべきイデオロギーに他ならないというべきである。個性が実現できる人とできない人があって、それは所有する能力の優秀性や希少性によって区分（分岐）されるという考えは、個性が実現できるかどうかはまさに社会が個人をどのように受け入れ、また排除するかという社会の仕組みの側にこそ責任があるという事実を隠蔽してしまうのである。

第五に、個性の実現が抱えるアポリアは、実は、人格とその所有する能力の乖離という資本主義社会における労働者が抱える矛盾を抜きにして考えることはできないことが分かる。労働者は、雇用されることを介して、自己の労働を通して他者と繋がる関係に入る（一つには労働者同士のつながり、二つには商品＝使用価値の生産を通し社会の中に自己を定位し、三つには、その商品の流通を介して消費する他者とのつながりに入る）にもか

かわらず、自己の作り出す創造物（商品＝使用価値）は、資本の計画性と指揮による生産物＝商品となり、それは資本の所有物となる。また消費者との関係は市場を介して、貨幣との交換行為として物象化されて実現される。本来、生産を通して自己の存在の不可欠性、そして他者と深い相互依存関係にはいり、そのことで自己の存在の固有性、独自性、社会的な相互依存関係を実現し、その関係の中で個性が実現されるはずであるにもかかわらず、生産力や関係力は資本の力、商品の力として現れ、また関係は物象化されて市場を介して実現される。この仕組みの下で労働の場は、逆に自己の存在の固有性、非代替性の実現を脅かす。労働者としての団結の衰退、解体という日本の現実には、労働者としてのアイデンティティをも希薄化させてしまう。ましてや派遣労働のような不安定な雇用形態においては、労働者個人が、自己の対象化として商品をとらえることは困難となり、労働はただ筋肉や神経の緊張をマニュアルにしたがって継続的に支出する苦役へと転化せざるをえない。未来へと繋がる今日を生きることすらできなくなると、自己のアイデンティティをその労働に託することはできなくなる。そして雇用労働の底辺に、そのような非人間的な扱いを受ける労働者階層を差別的に蓄積する格差社会が姿を現わすにおよんで、労働者は自己の労働をより「個人的」で人間的なものとしたと願い、自己の労働能力の優秀な差異性を競い合う「個性競争」へと走らざるをえないのである。したがって今日における労働の人間化の課題は、その賃金水準や労働者の生活権の保障に止まらず、労働それ自体のプロセスの人間化ともいべき課題をも含むものでなければならない。

職業へのアクセスを閉ざし、社会排除を及ぼすことにおいて個性の実現を妨げているという側面だけで今日の個性問題のアポリアを説明することはできない。労働へ参加するその仕方が個性を剥奪し、関係性への参加自体がその個性を抑圧するように作用するという個性の逆説ともいえる事態は、資本主義社会の仕組みそれ自体に起因す

るアポリアであり、さらにまたポスト近代（モダン）という時代の——すなわち資本主義的物象化が高度に展開した社会の——アポリアとして、その矛盾が解明されていかなければならない。

## （2）個性喪失の構造について

個性は個性の連続的展開において、自己を支えることが可能になる。

個性がうばわれているからこそ、個性実現の関係性に参入する手法として、「個性」の探究へと向かうという逆説が生まれている。誰からもすばらしいと賞賛され、その存在を輝かせる特別な力量や性格が、自らの個性を実現してくれる切り札として期待されてしまうのである。しかし個性は、そのような特別な能力や特性に依拠してではなく、その個人が自らの生きてきた歴史の中でつむいできたまさに固有の関係性の中で、自分の存在を受け入れ、支え、また期待しあう他者とのネットワークによってこそ、形成され実現されるものである。つながりとは、それなくして人が人間の本質としての共同性を実現することができない他者との関係性であり、共同性の実現無くして個性の実現もまたあり得ないのである。多様な中間集団や家族、地域、そして通常のいわば平凡な生活の日々からこそ、そしてまた平凡な労働への平凡な参加にこそ、存在の固有性、非代替性を実現する土台が存在するのであって、それが特別な才能を持たないものには許されないということ自体が、社会の病理にはかならないのである。その共同性の実現を極度に困難にする社会崩壊を生み出しておきながら、その土台の上で個性の探究を競わせるということ自体が、すでにもう根本的な論理矛盾であり、個性を個性とは異なった差異へと矮小化せざるをえない矛盾として働いているのである。

先にも述べたように、自分の存在の固有性は、まさに生きるに値する目的を持って生き抜いているという命の具現化として自己が存在しているということによって与えられるほか無いのである。そしてその命としての存在が、他者によって

支えられ、また他者によって期待されているという関係の中で、かけがえのない、非代替的なものとして自覚されるとき、存在の独自性としての個性が実現されるのである。そしてその個性をよりよく実現するための力として自己の所有している諸能力や諸性格が機能するとき、所有するものが、存在を支えるものとして機能するのである。所有する諸力は、存在の独自性という個性の実現の力として統合されるときに、個性を輝かせる力として働くのである。所有されている能力が、所有されているということだけで、それ自体として個性を実現するというものではないのである。

性格テストや職業適性テストは、現状において、その能力や嗜好や性格が、どういう職業向きであるかを判定するテストである。しかしそれはあくまで要素化された能力や性格を取り出してきて、確率的な対応関係によって「適性」を判定するものであって、その個人の中に蓄積されてきた目的意識や主体性と職業適性とを深く関連づけるものではない。重要なことは、そういう形で、自己の中に存在している特性を発見することが個性発見の方法として強調されるにもかかわらず、そこでは個性は、所有されている能力・特性としてとらえられざるをえないということである。すなわち〈have〉としての個性が探究されるのである。そしてその時、結局個性とは、他者にはないものを持っていること、すなわち他者との比較の中で優れたものを持っていることとして、自分を他者との厳しい競争と比較の中に連れ戻してしまうのである。そしてそこで、その所有するものによって自己を他者に対して差異化し有利な位置につくことを可能ならしめるような幸運を持つものは、ほんのごく少数でしかないのである。とするならば、自己の内に向かって個性を探究する行為は、それ自体が個性探究の迷路へと迷い込むことを意味せざるをえないだろう。

個性を剥奪された地点から、一挙に個性実現を可能とする華々しい関係性、その中で自己が輝くような場を見いだすということは、そもそも現実的ではない。むしろ求められるのは、自らの存在

のかけがえのなさを日常生活と日常の関係の中から紡ぎ出し、その関係性を発展させることのなかに未来への希望を見いだせるような、そういう個性の連続的な実現の方法である。自らが、かけがえのない日々を作り出し、その日々を力一杯生き抜くこと、そしてそういう自分の存在をかけがえがない一つの命の格闘として受け入れ愛すること、そしてまたそういうかけがえのない命が互いに支え合っているというかけがえのない関係性を作り出すこと、そこに個性実現の基盤をおかなければならない。そういうかけがえのない命を、自分もまた背負い、あるいは支え合っているという関係の中でこそ、自らの存在の独自性としての個性が実現されるであろう。

それは決して、他人より優れた能力を持つことを条件とするものではない。人間の尊厳が実現される社会は、決して、誰もが優れた、他者に勝る能力を獲得すること——そのこと自体が論理矛盾であり実現不可能である——によって達成されるものではあり得ない。平凡な能力は、他者を支え、自己を実現するための十分な能力なのである。そして人は、その実感された個性をより輝かせるために、その平凡な能力を磨き、発達させ、かけがえのない自己実現の力として、まさに自分の宝へと作りかえていくのである。平凡な能力では人間らしく生きられないというメッセージこそが、人を競争へ駆り立て、人間性を搾取するためのイデオロギーにほかならないのである。(2008年12月)